

張りつめて切れる、廻る

― 幸田露伴『幻談』（一九三八）について ―

吉田 大輔

はじめに

幸田露伴（一八六七―一九四七）の『幻談』（『日本評論』一九三八年九月）をめぐる先行研究は、すでに一定の蓄積がある^①。本論では、「幻談」をめぐるこれまで先行研究であまり深められてこなかった論点を主に二つ挙げ、この作品を再検討したい。

一点目は、「幻談」前半部のウインパー『アルプス登攀記』を典拠とする再話と、「幻談」後半部に語られる船上での出来事（これも再話である）は、主題的類似のみではなく、細部の類似によっても接続・編集されているのではないかと、という点である。「幻談」では、前半部に「山の話」が置かれ、後半部に「海の話」が置かれる。先行研究では、こうした「山の話」と「海の話」との併置の意義について、大まかにいつて二つの捉え方がある。「幻談」前半部に置かれた「山の話」であるウインパーをめぐる記述を「海の話」のまぐらのようなものと解釈してあまり重視せず、後半の「海の話」の分析に重きをおくか、「死」や「幻」といった大きな意味での主題的類似によってその連続性を理解するかである。筆者は、この点に疑問がある。この二つの話をめぐって、これまでの議論では、死あるいは死者との遭遇があつたのちになんらかの幻を見るという主題的類似が主に強調されてきた。しかし、筆者は、なんらかのひも状のもの（ロープ、釣り糸）が固着し、張りつめ、ふいに切断される、という細部の類似によっても、露伴はこの二つの話を接続し、編集したのではないかと考える。先行研究のなかで、関谷博の論は、ウインパーが十字架を前にして、それを「幻」かどうか「確かめよう」としている部分と「幻談」の結末を接続させて理解する指摘がある点などが重要だが、本論で注目したい点は、関谷の議論とも異なる。二点目は、「幻談」後半部とその類話とはどのような差異があるのか、という点である。「幻談」後半部に先行する類話の存在は、すでに指摘されている。しかし、それらの類話と「幻談」後半部の差異から見えてくる問題には、まだ

議論を深める余地がある。本論では、類話との大きな差異の一つを、後半部において重要な役割を果たす「釣竿」や「釣糸」がいずれも金銭によって購われたものではなく、水死者自身の創意工夫が結実した事物として登場する点にあると捉え、その意義を考察したい。

一、「幻談」成立のための露伴の読書と二人の編集者

『ブラクリチ』（一九三三）以降約六年近くの長きに渡って、露伴は「小説」を発表していなかった。「幻談」は、版元である『日本評論』編集部によって露伴の「最後の小説」としてやや大げさに広告され、発表直後から絶賛された（露伴の意識としては「幻談」をかならずしも「小説」とは思っていなかったという小林勇の言及があるので）^②。ただし小林の言葉もある程度割り引いて考える必要がある。これについては後述する。「幻談」は、一九三八年八月十二日前後と推定される時期に、露伴宅にてとられた速記をもとにして、露伴による加筆修正を経て世に出た。前述のように、「幻談」前半部には、ウインパー『アルプス登攀記』を典拠とする再話が置かれる。露伴は、どのようにしてウインパー『アルプス登攀記』を入手し、読んだのか。この本は、岩波書店の編集者・小林勇（一九〇三―一九八二）に贈られたものである。これまでも先行研究で指摘されてきたことだが、「幻談」成立をめぐることは、小林勇と下村亮一（一九〇一―一九九〇）という二人の編集者が、ときに反目しあいながら果たした役割が大きい。以下、本章の内容は、これまで先行研究で言われてきたことと大きな差異はないが、論旨の展開上、露伴が『アルプス登攀記』をいつ、どのように読んだのかを確認しておくことが必要なので、この点をいま一度まとめ直しておく。

まず、露伴に『アルプス登攀記』を贈った小林勇は、岩波茂雄の娘婿である。岩波書店で一九二〇年から二八年まで働いたのち、鉄塔書院を設立した。一九三四年からは、再び岩波の編集者に復帰する。小林は晩年の露伴との交わりが深く、彼の書いた『蝸牛庵訪問記』は露伴研究の重要な資料となっている。

次に、下村亮一は、一九三二年より『日本評論』の編集者となり、のちに『経済往来』編集長、『日本評論』編集長、経済往来社社長、同会長を歴任した人物である。小林勇と同様に晩年の露伴との交わりが深く、下村の書いた『晩年の露伴』は小林『蝸牛庵訪問記』と並んで露伴研究の重要な資料である。

小林が露伴のもとをはじめて訪れたのは「一九二六年（大正十五年）の春」^③、一

方の下村と露伴のつきあいはじまるのは、「昭和十三年の六月」⁽³⁾、つまり一九三八年六月のことだった。露伴との付き合いは小林勇の方が長いのだが、晩年の露伴の「小説」の原稿の多くは下村に渡され、『日本評論』に掲載された。具体的には、「幻談」(一九三八)のほか、「雪た、き」「鶯鳥」(ともに一九三九「連環記」(一九四〇)である。こうした一連の動きの皮切りとなった作品が、本論で取り上げる「幻談」であった。

「幻談」発表の前年、一九三七年三月十五日の『蝸牛庵訪問記』の記録では、露伴は小林勇に「チンダル」の『アルプスの氷河』というの面白かった」と語り、「あんな本がほかにもあつたらおくれ」と言つたらしい⁽⁴⁾。『アルプスの氷河』(John Tyndall, *The Glaciers of the Alps*, John Murray, London, 1860)は、矢島祐利が訳し、一九三一年に「上」、一九三六年に「下」が岩波文庫から刊行された。今日ではチンダル現象の発見者として知られる物理学者、ジョン・ティンダル(一八二〇-一八九三)は登山家でもあり、アルプス山脈ヴァイスホルンの初登頂を成し遂げ(一八六一年、同じくアルプス山脈マッターホルンの初登頂をエドワード・ウィンパー、ジャン・アントアン・カレルらと競い合った(マッターホルン初登頂は、ウィンパーが一八六五年に成し遂げる)。前年に翻訳が完結した岩波文庫のチンダル『アルプスの氷河』を小林勇は贈り、露伴はこれを面白く読んだらしい。その流れで、チンダル『アルプスの氷河』に類似した本があつたらまた贈ってほしいと露伴は小林に言い、小林はウィンパーの『アルプス登攀記』のことを露伴に告げる。ウィンパー『アルプス登攀記』は、チンダル『アルプスの氷河』の翻訳が完結したのと同じ年、一九三六年に上下巻二冊、浦松佐美太郎の翻訳で、同じく岩波文庫から刊行されていた(Edward Whymper, *Scrambles Amongst the Alps: In the Years 1860-63*, John Murray, London, 1871)。つまり、自分の出版社(岩波書店)が直近に出した本のうち、露伴の気に入るようなものがあれば、機嫌伺いにプレゼントしていたことだろう。この記述のわずか五日後、一九三七年三月二十日の記録では、露伴は小林に、ウィンパー『アルプス登攀記』について「なかなか面白い」と言い、うまい文章ではないが自分が体験したことを書くのは「なにか人に迫るものが出るのだ」とさっそく感想を語つたらしい⁽⁵⁾。小林はどのようにウィンパーの本を露伴に贈ったのか明言していないが、五日間の間に持参するか郵送するかして露伴に贈呈したのだろうか。ともかく露伴はすぐに読み、面白く思ったようだ。こうしたウィンパーの読書経験が反映されたのが、翌

一九三八年八月に口述された「幻談」の前半部であった。

一九三八年夏、露伴は口述の速記をとることを下村に許す。露伴は、下村に「夏場のことだから、涼しい話でもと考えてみた」と告げ、日を変えて行われた露伴の「幻談」口述は「はなしは巧みな講釈師よりも、まだまだ巧みなもので、何の淀みもなく」続き、下村は「大変な名作」という期待に胸がおどつたという⁽⁶⁾。こうして速記がとられた「幻談」について、一九三八年八月十三日、露伴宅を訪れた小林に「とうとうことわりきれなくて釣の話をした」といかにも自発的でない仕事であるかのように露伴は言い、その校正の面倒さも嘆いたという⁽⁷⁾。校正しているこの時点では、「幻談」が載る予定の『日本評論』九月号は、当然まだ刊行されていない。つまり、小林は「幻談」の内容をこの時点ではまだ知らない。吉成大輔も言うように、小林に対して申し訳なく思つて出たのが、露伴のこの言葉ではなかったか⁽⁸⁾。久しぶりの「小説」の原稿をつきあいが浅く、若い編集者・下村に渡したというだけではなく、「幻談」の内容は、小林から貰った岩波文庫の『アルプス登攀記』からの語り直しを前半部に置いた「小説」だったからだ。だから露伴は、しかたなしの仕事であるかのように小林には言つたのだろう。やがて八月十九日前後には、それが露伴「最後の小説」であるという広告が新聞に打たれた。この広告をめぐつて、小林は、「小説をしゃべつたなんて、あんな変な広告をしゃあがつてしようのないやつだ。あの話は今から百年くらい昔の話だ。もっと怪談めいて伝わった筋もあるが、あれは土左衛門が釣竿をもつていたというだけの話だ」という露伴の言葉を記録している⁽⁹⁾。「最後の小説」という大げさな広告文句に辟易した様子が描写され、たしかに露伴にそういう感情もあつたのかもしれないが、これも小林への配慮から言つたものだろう。そして、これ以降、小林の『蝸牛庵訪問記』のなかに「幻談」に触れた部分はない。後年、下村は、『晩年の露伴』において、露伴が「幻談」を「いやいやながら書き上げたように」小林の『蝸牛庵訪問記』が伝えていることへ反論し、七十二歳を過ぎ、身体的不調も抱えていた露伴の創作再開は「燃えるような制作意欲がなければ」不可能だとし、「幻談」を語り、書いたときの露伴のなかに「創作の意欲は燃えていた筈」と言う⁽¹⁰⁾。このように、編集者間の軋轢も生んだ「幻談」へのウィンパー『アルプス登攀記』利用だが、では前半部にこの本からの再話が置かれることは、作中でどのような機能を持つのか。

二、「幻談」前半部、一つ目の切断

「幻談」は、「高い山」「涼しい海辺」を併置させ、いま語ろうとする話は「海」の話だが、その前に「山の話」をしておく、としてはじまる。冒頭にある「もう老朽ちてしまへば山へも行かれず、海へも出られないであますが」⁽¹¹⁾のような古いへの自嘲を述べたような箇所は、ウィンパー『アルプス登攀記』の「登山は、主として、年若く或は強壯なる者に適した運動であつて、年老いたる、或は羸弱なる者には適しないのである。此の後者の人達には、激しき運動は、なんの楽しみでもなからう」という記述に依じて、露伴が述べているものだったかもしれない⁽¹²⁾。なお、浦松沢ウィンパー『アルプス登攀記』は、露伴が参照した一九三六年の初版と、のちの版（一九六五年改訂）とは訳文がかなり違つて、以降、古い一九三六年の初版を参照する。

前述のように、「幻談」前半部と後半部とは、「幻」「死」といった大きな主題的類似と同時に、「ひも状のものが切れる」という細部が反復されるという意味において接続されているのではないかと筆者は考える。この「小説」を前半部・後半部を含めた総体として捉える際、「ひも状のものが張りつめ、ふいに切断される」という二度にわたる出来事の反復と、そのちに切断の意味が肯定的に反転するように読めることが、この作品を理解する上で重要な点に思われるからだ。「幻談」前半部、下山するウィンパー一行の「ロープ」が切れる場面を見てみよう。これが「幻談」に描かれる、一つ目の切断である。

あらかじめロープを以つて銘々の身をつないで、一人が落ちてても他が踏止まり、そして、個々の危険を救ふやうにしてあつたのでありますけれども、何せ絶壁の處で落ちかゝつたのですから堪りません、二人に負けて第三番目も落ちて行く。（中略）ダグラス卿とあとの四人との間でロープはピンと張られました。四人はウンと踏堪へました。落ちる四人と堪へる四人との間で、ロープは力足らずしてブツリと切れて終わりました。丁度午後三時のことでありましたが前の四人は四千尺ばかりの氷雪の處を逆おとしに落したのです⁽¹³⁾

先行研究の多くが言うように、『アルプス登攀記』の記述によると、正確には、登頂前にペーテルの息子ふたりのうちひとり返しているために、七人のパー

ティであるが、ここで露伴はなにか誤解してか「八人」のパーティとして、彼らがロープで互いの安全を確保しつつ、マッターホルン初登頂を果たしたのちに下山する際に起こった事故を書いている。先頭にたつていた山岳ガイド・「クロス」（ミシェル・クロ）に、「二番目に先頭にいた「ハドウ」（ダグラス・ロバート・ハドウ）が経験不足もあつて滑落してぶつかり、この二人の滑落が同時に起こることとで、三番目にいた人間（「幻談」で露伴は名前を書いていないが、チャールズ・ハドソン牧師）も滑落し、さらに連鎖して四番目にいた「フランシス・ダグラス卿」も滑落する。その時に一瞬踏みとどまることはできたものの、ダグラス卿と踏みとどまる人間たち（ウィンパーと山岳ガイドのタウクヴァルダ親子の三名）との間でロープが張りつめ、「ブツリと切れて」しまい、滑落した四名はそのままアルプスの谷底に落ちていくさまが語られている。本来、互いの安全を担保するものであつたはずの「ロープ」によつて連鎖的に事故が起こり、そのロープが「ブツリと切れて」しまうことで、ウィンパーたちは助かり、ダグラス卿たちは一四〇〇メートル下に落下して死んでしまう。張りつめたロープが切れる、という一瞬の悲劇ののち、失意と混乱の中で下山を続けるウィンパー一行「四名」（露伴は「四名」と書いているが、本当は三名）の間で「二つ」の「十字架」が見えた、という「幻影」が複数の人間に共有される。

三、切断への弁明、ロープをめぐる過剰な言葉

このような事故はどうして起こつたのだろうか。老ペーテル（山岳ガイド、タウクヴァルダ親子の父親）とダグラス卿をつないでいた「ロープ」自体に問題があつたと『アルプス登攀記』では繰り返し述べられているが、露伴は「幻談」でこのことには言及していない。ロープが切れる瞬間は、露伴が読んでいた古い翻訳の浦松沢ウィンパー『アルプス登攀記』で「凡ては一瞬の出来事」であり、「私達は、此の衝動を食ひ止めることが出来た。併し、ロープは、タウクワルダとフランシス・ダグラス卿の間で、ぶつくり切れてしまつた」と書かれ、「ロープが切れた刹那に、既に、彼等を救ふ望みが絶えてしまつたのである」とも書かれる⁽¹⁴⁾。ここで注意したほうがよいのは、ウィンパーは、滑落そのものが問題だとは言っていない点である。踏みとどまつたウィンパーを含む三名は、「衝動を食ひ止めることが出来た」とあるように、滑落する四名の体重を支えることができたが「ロープ」のせいでは事故は起こつたのだ、と言っている。さら

に続けてウインパーは、切れたロープを確認し、「驚いたことには——本當にぞつとする程驚いたのであるが——此のロープは、三本のうちで、「一番弱いロープ」であったと言う⁽¹⁵⁾。本来、命綱として使用すべきでない「一番弱いロープ」が老ペーテルによって使用されたことにウインパーは驚いてみせ、そもそもこのような用途に用いるべきでないロープが、自分のあずかり知らないところで使用され、そのことにはじめて気づいたかのように書いている。しかしこうしたウインパーの記述をそのまま信じてよいのかどうか、特に事故の原因に関する部分の信憑性には、現在では疑問が呈されている。

ウインパーに同行した案内人・タウクヴァルダー親子の父親、老ペーテルをめぐっては、この事故以後、自分が生き残るためにロープをあえて切断したのではないかという説が流布され、そののちの彼の人生を狂わせた（このことは、露伴が目にした岩波文庫本文にも解説にも書かれていない）。他方で、イギリス人として唯一生還し、帰国したウインパーへの同時代的非難も、すさまじいものであったようだ。一八六五年前後のイギリスの登山をめぐる状況とウインパーへの非難に関しては、露伴が読んだ旧訳版の岩波文庫でも、本編の前に置かれた訳者の浦松の解説のなかで多少触れられている。浦松は、この事故は「全欧州に大きな衝動を興へた」ものであり、この事故がきっかけとなって「登山の危険が論ぜられ、或は登山禁止論すらも唱へられ」「登山者が白眼を以て見らるる時期が続く」ようになり、「ウイムパーに加へられた非難の咎は烈しかった」のだと書いている⁽¹⁶⁾。

二〇一五年、スイスで制作されたドキュメンタリー「マッターホルンと負の遺産 切れたロープの謎」は、興味深い指摘を二つしている⁽¹⁷⁾。一つめは、当時の麻のロープではたとえ太いほうの縄を使っているロープは切れただろう、ということである。もう一つの指摘がより重要であり、それは、イタリア人カレルらのパーティーと初登頂を競っていたウインパーは、もう少しで初登頂が成功するというとき、自分が第一番に登頂しようとして、仲間と確保しあっていた太いロープを自ら切って駆けあがった疑いが濃厚である、ということである。下山時に老ペーテルが細いロープをなぜ使用したのかはこれまで謎とされてきたが、ウインパーが登りの際に太いロープを切ってしまったために、これが使用できなかったのではないか、つまり、四人の死の原因をつくったのは直接にウインパーだったのではないか、という指摘である。生存者三名のうち英

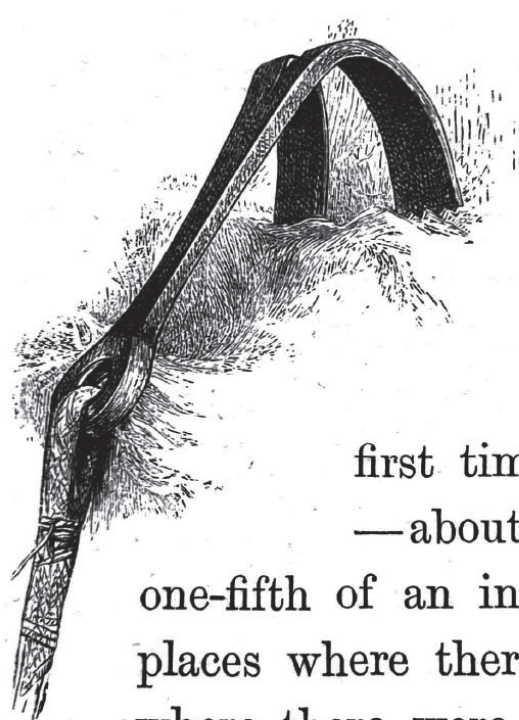
語使用者はウインパーのみであるという事情もあいまって、この点を隠し、老ペーテルにすべて責任を負わすかたちで『アルプス登攀記』の原著はイギリスで書かれた、とこのドキュメンタリーは指摘する。筆者はこの指摘の可否を判断できないが、すくなくともウインパーが『アルプス登攀記』を書こうとした同時代的な状況は見えてくる。『ウインパー伝』を書いたスマイスも、当時のイギリスのメディアが、さかんに帰国後のウインパーを論難し、登山の危険を訴える論評を載せた様子を伝えている。スマイスの伝記が引用している当時の『タイムズ』では、たとえば、「（ウインパー個人への批判を書いたあと、さらに英国登山協会への論難へと移る文脈で）力がおよばないとするならば、実際のな道具を考案しなければならぬ」と言い、「何をおいても、まず、ロープが切れてはならない」、そしてなぜ登山用具の開発をおろそかにするのか、「あらゆるものを使ってもまだまだ骨の折れる非常に危ない仕事」が登山なのだと言った記事などが出たようである⁽¹⁸⁾。登山者の訓練やルート探索は英国山岳協会が責任を持つべきであり、それができないのならせめて登山用具の改良を行うべきだという文脈で、ロープの切断は何より回避されなくてはならない事態だと主張されている。

こうしたウインパー個人や登山そのものの非難の状況がいくらか鎮静化したのち、一八七一年、マッターホルン初登頂から約六年後に出版されたのが、ウインパー『アルプス登攀記』の原著だった。これを書いたときのウインパーは、かつて受け、いまなお続く非難に対して反論し、自己を弁護し、さらに登山そのものも弁護する必要があった。『アルプス登攀記』を通して読むと、ウインパーが登山のなかで工夫して使用した道具、とくにロープやロープに付随するものへの言及が不自然なまでに多いことに気づくが、これは、こうした文脈に負うものなのである。

マッターホルン登攀のための新しい登山道具を事前にいくつも考案・改良し準備したのだとして、それらの道具に対して『アルプス登攀記』前半でウインパーは詳しく言及する。こうした筆致からは、自分は決して準備を怠っていなかった、というウインパーの主張が読み取れる。ウインパーが工夫し、改良したと強調する道具の一つは、たとえば、岩にひっかけて登攀や下山を助ける鉤（フック）であった（図版1）。単独での登山も想定して開発したというこの鉤は、ロープで岩にひっかけて登る際や降りる際に使用するもので、下山時に使用する際には「ロープはびんと張り切らし、然も鉤と同じ方向に引張つていなければ

ばならない」とウインパーは言う⁽¹⁹⁾。登山の黎明期であったこのころ、登山家の仕事は山に登ることだけではなかった。山に登るための道具の発明・改良は切実な課題で、ウインパーは実際に「ウインパー・テント」(図版2)などを開発しており、これは一九七〇年代以降にドーム型テントへとつてかわられたが、改良を重ねながら百年近く使用された。このように実際にウインパーが考案したもののがひろく使われ続けた例もあるので、『アルプス登攀記』の道具の開発の記述は虚偽ではないが、自己弁護のためにその努力や効果を強調しすぎる側面があったと言える。

登攀のために新しい道具を工夫してつくったことを強調して語ったのが『アルプス登攀記』の無視できない側面だが、ウインパーがアルプス登攀のために発明したものの一つが、ロープの先につける鉤(フック)だったことが筆者には「幻談」考察のうえで示唆的なことにおもわれる。鉤をロープに結びそれを介して山を登ったり下りたりする行為は、ひも状のものと鉤を使用した垂直の運動として、後半の釣りの話につながるものだからだ。



first time.
—about five
one-fifth of an inch t
places where there wa
where there were crack

(図版1) Edward Whymper, *Scrambles Amongst the Alps: In the Years 1860-69*, John Murray, London, 1871, p.110、
ウインパー自身による挿絵、筆者所蔵の初版本より転載

ロープの効用や自分がいかにロープを大切にしたかをウインパーは、くどいほど繰り返して書いている。「私は、氷河を歩くに際して、何よりも大事なことは、優良なロープを十分に持つてゆくことだと思う」⁽²⁰⁾「人と人との間に、ロープをびんと引き緊めて置くことは、何よりも重要なことである」⁽²¹⁾「私は、登山の前の晩に、ロープを端から端まで注意深く調べる様にしてゐた」⁽²²⁾、こういう箇所を露伴も読んでいたわけである。もちろん、露伴は、こうした部分を「幻談」の前半部で紹介しているわけではなく、こうした記述が持つ弁明性についてどの程度それを理解していたかはわからない。しかし、「幻談」において、ひも状のものの切断が繰り返されることと、「幻談」の冒頭に置かれるエピソードの典拠『アルプス登攀記』のロープ記述のしつこさは、筆者には無関係に思えない。露伴の読んだ『アルプス登攀記』とは、ロープについての本でもあったのである。



ALPINE TENT.

(図版2) Edward Whymper, *Scrambles Amongst the Alps: In the Years 1860-69*, John Murray, London, 1871, p.100、
ウインパー自身による挿絵、筆者所蔵の初版本より転載、以上2枚を含む原著にあった挿絵は、露伴の見た岩波文庫にも転載されている。

四、「幻談」後半部、二つ目の切断

ウィンパー『アルプス登攀記』に基づくこの短い前半部について語られる後半部において、前半部の「ロープ」とよく似た働きをするのは、釣り糸である。後半部は、「自分が魚釣を楽しんで居りました頃、或先輩から承りました」話という前置きのちに語られ始める。徳川期もまだ末にはならないころ、江戸の本所に非役の小普請の旗本がいた（作中でこの侍の名は明かされない）。「奢りも致さず、偏屈でもなく、ものはよく分る、男も良し、誰が目にも良い人」という人物である。この侍は釣りが好きで毎日のように船を雇って釣りに出ている。いつもやる釣りは決まっていて、下品ではない釣りとして語り手が言う「ケイヅ」（黒鯛）釣りであった。やや年配の「吉」という名の船頭をいつも使った。ケイヅ釣りを中心として、釣りをめぐる極めて具体的な説明が続く。あるとき、よく釣れそうな条件に恵まれているにも関わらず、二日続けてまるで釣れないことがあった。けれどもこの侍はそのことに不平を漏らしたりはせず、もう帰ろうと「吉」を促す。却って意地になったのは船頭の方で、「まづみ」（釣りの用語で、日の出と入りの前後は魚が餌をよく食うとされる時間）にあてようとして、いつもは船を向けない場所であつて、真正面にうまく振り込むように言う。ここに二つ目の切断が描かれる。

すると今手にしてゐた竿を置くか置かぬかに、魚の中りか、芥の中りか分らぬ中り、――大魚に大ゴミのやうな中りがあり、大ゴミに大魚のやうな中りがあるもので、然様いふ中りが見えますと同時に、二段引どころではない、絲はピンと張り、竿はズイと引かれて行きさうになりましたから、客は竿尻を取つて一寸當て、直に竿を立てにかゝりました。が、此方の働きは少しも向ふへは通じませんで、向ふの力ばかりが没義道に強うございました。竿は二本継の、普通の上物でしたが、継手の元際がミチリと小さな音がして、そして絲は敢へ無く断れてしまひました。魚が来てカ、リへ唧へ込んだのか、大芥が持つて行つたのか、もとより見ぬ物の正體は分りませんが、吉は又一つ此處で黒星がついて、しかも竿が駄目になつたのを見逃しはしませんで、一層心中は暗くなりました⁽²³⁾

振り込んだ瞬間にあたりが来たが、大魚がかつたのか、なにかに根がかり

したのかわからないままに、竿にはひびが入り、釣り糸も切断されてしまつ。「かかり」は魚が多く群れる一方で、根がかりしやすい場所である。根がかりしないようにうまく振り込んだはずなのに、釣竿を置くか置かぬかの瞬間に、竿には強い「中り」の感触が伝達される。それは「大魚」の中りのようでもあり、「大ゴミ」の中りのようでもある。さりげない描写だが、引きあげてみるまでなにが糸の向こうにいるのかわからないという、釣りのもつ隠された不気味さやうまく描かれているようにも見える⁽²⁴⁾。「絲」は「ピンと張り」つめ、竿さえ海中に引き込まれそうになる。竿を立てることで旗本の男はなんとかしようとするが、「少しも向こうへは」通じない。この男の持ち物である「二本継」の「普通の上物」の竿の「元際」へヒビが入る音がし、そして「絲は敢へなく断れて」しまふ。こうして「ピンと張」つた「絲」によって一瞬の緊張が起こり、「絲」が切断されることでまた通常の時間に戻る瞬間が描かれる。

前半部に置かれたウィンパー『アルプス登攀記』からの再話には、ロープが張りつめる緊張した一瞬とその切断、切断がもたらす死、そしてそのあとに見る幻、という要素が見られた。この場面での釣り糸の切断は、前半部のロープの切断のように直接的な死と因果の関係で結ばれたものではなく、その点はもちろん違う。また、こうした部分をあつてもなくてもよい些細な描写だと思える人もいるだろう。しかし、筆者はそう考えない。この釣り糸の切断は、前半部に置かれたロープの切断を、ひも状のものが張りつめふいに切れる緊張の一瞬、という意味で反復している。こうした一見些細に見える反復は、前半と後半をつなぐ重要な具体的な描写に思われ、読者に「海の話」で次に起こる出来事を予想させもする。事実、この出来事のすぐ後に、旗本の男と「吉」は、釣竿と水死者に遭遇していくことになる。

この場面の後、二人はあきらめて、けれど不機嫌にもならず陸へもどろろとする。もうすべてが薄く暮れてきて、いろいろなものをはっきりと見定めがたい時間となっていた。その途中に、葎か蘆のようなものが海中を出たり入ったりしながら浮いているのに気づく。どうも釣竿ではないか、と思い、「吉」はそこへ船を寄せる。それは野布袋竹でできたよい竿のようだが、それを握って離さぬ水死者の姿にも同時に二人は気づく。「吉」はよい竿だといい、それをとることを侍に暗に薦めるが、侍は返してしまえと言っただけだった。「吉」は釣竿をつかむ。引かれて、水死体は、侍のすぐ前に姿をあらわす。眼の前に竿が現

れると、なるほどよいもので、侍はそれに手を握る。持たないうちこそな
んでもなかったが、手に握ってしまうと竿を所有したいという気が起こる。姿
をあらわした水死者は、六十近い侍であった。竿をとるために指をほどこうと
するが、どうしてもほどけないので、指を「ぎくり」と折って竿をとってしま
う。指が離れたとたん、水死者は流れていってしまう。あれは岡釣をする人で、
釣りの最中に中気を起して海へ落ちたのだらうと二人は語る。そして侍はその
竿を持って帰る。

五、反転する切断の意味、「段々細」について

彼らが拾う釣竿という事物については次章でも検討したいが、本章では、作
中のすこしあとの時間、釣竿を拾ったあとの一つの場面をさきに見ておきたい。
釣竿を持ち帰った翌日、旗本の男の家で雨が上がるのを待ちながら、吉と二人
で会話を交わす場面である。そこでは、ひも状のものの切断をめぐる会話がな
される。そして、釣竿や糸という事物から廻るようにその持ち主が語られてい
く。重要と思うので、少し長めに引用する。

二人はだん／＼と竿を見入つてゐる中に、あの老人が死んでも放さずにあ
たい心持が次第に分つて来ました。(中略)『時にお前蛇口を見てゐた時に、
なんぢやないか、先についてゐた糸をくる／＼と巻いて腹掛のどんぶりに
入れちやつたぢやねえか』『え、邪魔つけでしたから。それに、今朝それ
を見まして、それでわつちがこつちの人ぢやねえだらうと思つたんです』
『どうして』『どうしツたつて、段々細(だん／＼ほそ)につないであります』
段々細につなぐといふのは、始まりの所が太い、それから次第に細いの又
それより細いのと段々細くして行く。この嚴しい例は加州やなんぞのやう
な國に行くとき鮎なんぞを釣るのに蚊鉤など使つて釣る。その時蚊鉤がうま
く水の上に落ちなければ拙い。糸が先に落ちて、あとから蚊鉤が落ちては
いけない、それちや魚が寄らない。そこで段々細の糸を拵へる。どうして
拵へますかといふと、銚を持つて行つて、良い白馬の尾の具合のいゝ、古
馬にならないやつのを銚で頂戴して来る。さうしてそれを豆腐の粕で以て
それをぎゆう／＼と次第々々にこく。さうすると透き通るやうなきれいに
なる。それを十六本右捻りなら右捻りに捻る。最初はなれないけれども、少

しなれると譯なく出来ることで、片捻りに十捻る。さうして一つ拵へる。そ
の次に今度は本数を減らして前に右捻りなら今度は左捻りに片捻りに捻り
ます。順々に本数をへらして、右左をちがへて、一番終ひには一本になる
ようにつなぎます。あつしあ加州の御客に聞いておぼえましたがね、西の
人は考へがこまかい。それが定石です。此竿は鮎をねらふのではない、テ
グスでやつてあるけれども、うまくこきがついて順減らしに細くなつて行
くやうにしてあります。この人も相當に釣は苦勞してゐますね、切れる処
を決めて置きたいからさういふことになるので、岡釣ぢや尚ほのことです、
何處でも構はないでぶつ込むのですから、ぶち込んだ所にかかりがあれば
引かかつてしまふ。そこで竿を勞はつて、しかも早く埒の明くやうにする
には、竿の折れさうになる前に、切れ處から糸のきれるやうにして置くの
です。一番先の細い所から切れる譯だから、それを竿の力で割出していけ
ば、竿に取つては怖いことも何もない。どんな所へでも、ぶち込んで引か
かつていけなくなつたら竿は折れずに糸が切れてしまふ。あとは又直ぐ針
をくつつければそれでいいのです。この人が竿を大事にしたことは上手に
段々細にしたところを見てもハッキリ讀めましたよ。どうも小指であんな
に力を入れて放さないで、まあ竿と心中したやうなもんだが、それだけ大
事にしてゐたのだから、無理もねえでさあ。』

などと言つてゐる中に雨がきれかかりになりました。主人は座敷、吉は
臺所へ下つて晝の食事を濟ませ、遅いけれども『お出なさい』『出よう』と
いうので以て、二人は出ました。無論その竿を持つて、そして場所に行く
迄に上手に自分でシカケを段々細に拵へました⁽²⁵⁾

この箇所の直前では、拾つてきた野布袋竹を用いた釣竿を仔細に觀察するう
ち、旗本の男と「吉」とは、竿に施された持ち主の工夫のあれこれに廻行的に
気づいていく。それらはすべて、どうも水死者の手ずからの工夫らしいことを
見てとる。それに続く場面である。釣竿だけではなく、釣り糸をどのように元
の持ち主が工夫していたか、ということに焦点があてられ、その細部から、元
の持ち主の人物像やそのひとが行った釣りがどのようなものであったかが想起
されていく。それに気づくのは、旗本の男ではなく、船頭の「吉」である。竿
を手にいれた際に、釣り糸を腹掛けの「どんぶり」にしまつて持ち帰った「吉」

は、それを観察するうちに「段々細」という特殊な撚り方をした糸であることに気づき、旗本の男へそれを語る。

釣り糸に施された工夫として、先端に行くほど釣り糸を細くし、弱くするという「段々細」というディテールを詳しく描写していることが、この作品にとって非常に重要なことに筆者には思われる。この箇所の重要性は、はじめに置かれたウインバーのロープの切断や、旗本の男のもとの竿にヒビを走らせた根がかりによる切断という、二つの否定的な出来事、「張りつめて、切れる」を会話の中でなぞりながら、竿を守るための創意工夫がもたらした切断として、その意味を肯定的なものに反転させている点にある。釣り糸が張りつめて切れることが、竿を守るためにもとの持ち主が行った複雑な仕掛けの結果としてここでは語られている。

また、旗本の男は、水死人がかつてしていたと思われる行動（段々細の仕掛けをつくり、釣りへ向かうこと）を、竿を拾ったのち、はじめてその竿を使う釣りに行く場面で反復していく。これは、この竿を入手するまでには行っていないかった行動であり、この行為の反復が、死者の側にやがてもういちど接近していくための重要な細部になっている。とはいえそれは、多くの怪異譚にあるように、死者に魅入られたり、死者に呪われたりした結果に起こる模倣ではない。そうではなく、釣り糸の「段々細」の仕掛けからもとの持ち主がこの釣竿へ向けた愛着に気づいたために旗本の男が行った、意識的な反復行為なのである。

関谷博は、ウインバーの『アルプス登攀記』を典拠とする前半と、こうした海の話との後半との関係を「両者に関係があるとすれば、それは例えば、山＝垂直性、海＝水平性といった鮮やかな対照性である。そしてこの垂直性／水平性は、生／死の分割の仕方の差異として、『両作品に表される』⁽²⁶⁾と言っており、この見解には同意する部分もあるが、むしろ「幻談」の前半と後半は、ひも状のものの切断のヴァリエーションとしてはつきり接続されていると考えるべきではないかと思う⁽²⁶⁾。「幻談」の語りだしにあるように、山、海へ「行」く運動として捉える限り、垂直性（山へ登る、下りる）、水平性（舟で漕ぎ出す）という対比が見てとれるのはその通りである。だが、「幻談」の前半と後半の関係は、もう少しこみいったもののように思える。そもそも釣りは、糸を介して水中へと働きかけ、そこに生きるものを引き上げようとする垂直の行為ではないのか。これまで先行研究で言われてきたように「幻談」の前半部と後半部は、舞台となる

山・海、生・死が対照をなしながら提示され、それらが「幻」や「死」といった大きな意味での主題的な類似によって結ばれているのはたしかだろう。だがそれと同時に、ロープや釣り糸というひも状のものを介しての運動という細部の類似によっても結ばれており、これら二つの併置は、そうした垂直の運動が切断されることによって死や死者との近接を見、幻へ誘われる、というより細かい意味での構造を共有し、接続されている。

露伴はその部分は省略してまとめているとはいえ、本論第三章で確認したように、『アルプス登攀記』の事故の原因は、下山時の確保に「一番弱いロープ」を用いたためだったとウインバーは言っていた。また、本論第四章で確認したように、根がかりしてしまえば、強い糸はその張りつめる力によってむしろ竿まで破損させてしまう。「幻談」全体の構成が巧みなのは、それだけで終わらず、いま確認したように、あらかじめ仕組まれた弱さによって糸が切れることを、竿にかかる無理な力を逃すための創意工夫として変奏していく点にあるだろう。

六、ものから遡る、創意工夫の物語としての「幻談」

「幻談」後半部に先行する類話は、岡保夫、青木稔弥によってすでに指摘されている。最後に、こうした類話との差異を改めて捉えなおしてみよう。露伴自身が作中で「或先輩から承りました御話」と言っているし、本論第一章で引用した小林勇が写した露伴の言葉にも、類話の存在は示唆されていた。これを受けて、岡は、差異を多く含むものの、薄田泣菫「片腕」（『茶話』所収）が「幻談」後半部の類話の一つではないかと述べ、同じ材源から枝分かれしたのが、薄田泣菫「片腕」と露伴「幻談」ではなかったか、とする⁽²⁷⁾。薄田泣菫「片腕」は、次のような話だ。

むかし釣好きの江戸つ児が鱈を釣りに品川沖へ出た。ちやうど鱈釣に打つてつけの日和で、獲物も大分あつたので、船のなかで持つて来た酒など取り出して少し飲んだ。ほろ酔の顔を櫂つたい程の風に吹かせて、その男はまた釣り出した。すると直ぐ一寸手應がしたので、「おいでなすったな。」と獨語を言ひ言ひ、鉤を合はせてぐつと引揚げた。鉤には誰かが河豚にでも切られたらしい釣鉤と錘具とが引つ係つてゐるばかりで、鱈らしいものは一尾も躍つてゐなかつた。「へつ、遣られたかな。」と男は呟きながら、何

気なく其の釣綸を引張り寄せると、ちらと釣竿の端が見え出した。半分程引寄せてみると、これはまた結構な釣竿で、自分の持合せなどは、逆も比べ物になりさうにもない。「い、竿だ。大分金目の掛った拵へだぞ……」こんな事を言ひ、竿の根本まで引揚げると、しつかり握り詰めた人間の片腕がずつと揚つて來た。「や、死人が……」釣好きの男は、覺えず聲を立て、手を放そうとしたが、打捨るには餘りに結構な釣竿なので、「氣の毒だが、餘り結構だから、此の竿だけは貰つとくしよう。」と、言譯をしい、其片腕を捉へて、堅く握りつめた五本の指を解いた。竿から外された片腕は黙つて靜んで行つた。「金目の懸つた竿だけに、溺れて死ぬる場合にも心残りがして、あんなに耽り握り緊めてゐたのだからうて。」と拾つた男は後々まで噂をしながら、其の竿で鱈を釣り、蟹を釣り、ある時は剽軽な章魚を釣つて笑つたりした⁽²⁸⁾

岡について、青木は、薄田の話のもとになつたと思われるものを、さらに遡つて指摘している⁽²⁹⁾。それは、徳川期・嘉永年間に書かれた鈴木桃野「反古のうらがき」の中にある「きす釣」という話である。以下のような話だ。

きす釣

きす釣は工拙によりて獲物多少あれば、釣道具釣竿に至る迄六ヶ敷物なり、近來は左程迄六ヶ敷事もなく、多く湧たる年は、はぜ同様に釣ることもあれども、一體釣にくき物也、故に釣竿の好きを選らみて、争ひて買ひ、値一竿金一分も出るよし、これを持て出れば、衆にすぐれて獲物ある事なり。されども如レ此きは稀にて、皆三四匁位にて事を濟す者多し、獲物は其日の日並によりて大體には獲物あることぞかし。或士釣を好みて道具も相應なるを用ひ、獲物も相應に有りて、一日快く樂み、酒など取出で數盃を傾け、氣げん一倍して釣けり、品川沖を東へと釣行けるに、手ごたへして引上るに、釣ばりとおもりと一具かゝりたるにて、魚はなし、其儘に引上て、段々と引に絲つきて竿出たり、又これを引に、餘程よき竿にて、高金の道具も見ゆる、大事に引上、竿の元に至れば、堅く握り詰たる片腕見えたり、其人も興醒めて見えしが、酒の力にか、膽太くも其腕をとらへ、餘り好竿なればおれがもろふと言ざまに、腕を引離ち突やりて、船を早めて乗かえ

しけり。よくく見るに勝れし好竿にて、つり合よし、思ふに此人高金にて求めしが、如何してか過ちて溺死するといへども、此竿の惜しさに、堅く握りて死けると思へば、吾人も同じ物好の餘り命を落すといへども、執着するならんとて回向して、矢張此竿を用て釣りに出るよし、語り傳へしを聞ける⁽³⁰⁾

この二つの話を参照すると、たしかに「幻談」後半部と話の大枠は共通している。ただし、薄田泣菫『茶話』、鈴木桃野「反古のうらがき」、「反古のうらがき」を収録し大正期に刊行された三田村鳶魚編『鼠璞十種』などのいずれの書名も、露伴蔵書の記録にはない⁽³¹⁾。一方で、一九〇七年から一九一一年まで三十一回に渡つて行われた稀覯本愛好者の会、欣賞會に露伴は中核の一人として参加している。日沼澁治も言っているが、三田村鳶魚が『鼠璞十種』を編む際、底本にしたのは、欣賞會で露伴と親交のあつた三村竹清（一八七六―一九五三）の所蔵にかかる鈴木桃野「反古のうらがき」であつた⁽³²⁾。したがつて、欣賞會での付き合ひを通じて、三村竹清所蔵の「反古のうらがき」を露伴は見たと考えるのが現時点ではもつとも自然だろう。ただし、三村竹清が書き写した欣賞會の記録には、「反古のうらがき」が回覧されたという内容はない⁽³³⁾。

とはいえ、これらもあくまで現時点で判明した類話からの推測で、「幻談」をめぐるほかの証言と依然として整合しない部分も残る。たとえば塩谷贊は、「先輩から聞いた話では指を切つて取る」話だが、それは「慘酷」に過ぎるから設定を変えたのだと露伴からの直話を聞いたことを書き残しているが、この要素は、薄田・鈴木の話にはない⁽³⁴⁾。また、塩谷の露伴からの聞き書きには、「直したのはその一箇所だけ」だと露伴が言つたように、つまりほかの部分は露伴が「或先輩から承りました御話」そのままなのだと言つたようにも書いてある。この「或先輩から承りました御話」がどのようなものか分からない以上、そこに露伴が加えた改変の程度が實際どのくらいなのかは判断できない。三村竹清は露伴より九歳ほど若く、「先輩」ではない。また、本論冒頭に引いた小林が、露伴は「幻談」の類話の中には「もつと怪談めいて伝わつた筋もある」と言つたとしている点も氣にかかる部分である。薄田・鈴木の類話が「幻談」より「もつと怪談めいて」いるかというとなかなかそうは思えず、薄田の語り直しは笑話に近いニュアンスさえある。どうもまだ判明していない別の類話があるように

も思えるが、この点は現時点ではわからない。

したがって、以下に言うことは一定の留保つきではあるものの、とりあえず判明している限りの類話を二つ確認すると、さまざまな「幻談」との差異が見え、むしろ際立つのは「幻談」の特異性ではないか、という方向で最後に考察を進めてみたい。そもそも青木がすでに指摘しているように、薄田泣菫の「片腕」は、はっきり鈴木桃野「反古のうらがき」の再話であり、明白な親子関係にあると言つてよいので、薄田・鈴木の一話は当然よく似ている。しかし、露伴「幻談」とは、大枠を共有しつつ、差異が多い。まず、類話二つと「幻談」との差異を大まかに整理すれば、おおよそ次のようになるだろう。

【類話と「幻談」との主要な差異】

- ① 行う釣りがキス釣りであること「幻談」では「ケイツ釣り」
- ② 竿を拾う日、釣果がまるで得られなかったわけではないこと「幻談」ではまったくなかったように書かれる
- ③ 釣竿を新たに拾う前に、もともと所有していた竿が根がかりによって破損していないこと「幻談」では根がかりによって破損している
- ④ 釣竿を新たに拾う前に、釣り糸も切れていないこと「幻談」で切断が回復されることは今まで見てきた通りである
- ⑤ 釣竿を拾う際、釣竿そのものが釣れるという話になっていること「幻談」では、釣竿は海を漂っており、水面から顔を出しているのを発見される
- ⑥ 拾った釣竿のよさが金銭的な理由によってしか説明されないこと「幻談」では、さまざまな工夫がおそらく水死者自身によってなされたように書かれる
- ⑦ 釣竿を最初から拾うつもりでいること「幻談」では最初は拾うつもりがなかったように書かれる
- ⑧ 水死者の身体が「片腕」という形でしか提示されないこと「幻談」では水死者がどのような姿だったのかはつきりと描写される
- ⑨ 指を解いたり、腕を引き離すだけで、指を折って釣竿をとったという話ではないこと「幻談」では指を折って釣竿をとる
- ⑩ 船頭との交流がまったく描かれないこと「幻談」では船頭の「吉」とのやりとりが多く描かれる
- ⑪ ⑥とも関連するが、釣り糸と釣竿に水死者がなした創意工夫が語られない

こと「幻談」では、竿のみならず糸に行った「段々細」の工夫まで詳しく語られる

- ⑫ 釣竿らしきものとふたたび出会うかのような描写がないこと「幻談」では、ふたたび同じように竿らしきものが海の中に漂っているのを見る

- ⑬ 釣竿を海へ返すことをせず、使い続けたように書かれること「幻談」では、竿を海へ返してしまう

先行研究では、野口武彦が⑦や⑬に注目し、釣竿を拾う際のためらいや海に再度返すという類話との差異をめぐって、徳川期の人間の感性としては水死者の持ち物を奪うことはそこまでやましいことではなく、この点を露伴が書きかえているのは「文明の隔たり」であるとしてここに「近代」を読む見解を示したほか、⑫は露伴による独自の書き換えではないかとする吉成大輔の見解などもあるが、類話との差異からなにが見えてくるのかという問題はまだ考察の余地が多い⁽³⁵⁾。そこで本論では、⑥拾った釣竿のよさが金銭的な理由によってしか説明されないこと、⑪釣り糸と釣竿に水死者がなした創意工夫が語られないこと、以上のこれまでさして注目されてこなかった二点の差異に、特に着眼してみたい。

旗本の男が拾う釣竿や釣り糸が「幻談」では水死者の創意工夫の結実した事物として登場するのに対して、類話にはそのような描写が見られず、釣竿、釣道具いずれも「金目の懸つた竿」(薄田)「思ふに此人高金にて求めしが」(鈴木)と金銭によって購入された高級品であると書かれるだけである。水死者の釣竿への執着は、高価な竿だから、という単純な原理によってしか説明されていない。

さきにひいた塩谷が写す露伴の言葉「直したのはその一箇所だけ」なども軽視すべきではないだろうが、現在までに判明している類話二つと比較すると、むしろ差異が多すぎ、露伴の言葉とやはり整合がとれない。また、塩谷の記述では、そのあとに舟で帰ってくる場面の描写などを聞かれ「あれは自分の経験をつかったのさ」と独自の描写である旨答えたという露伴の言葉も書かれているので、典拠と露伴が言う「或先輩から承りました御話」へどの程度の改変を加えているかの判断は、やはりなかなか難しい。①から⑬のうち、つまり、はっきり露伴が自己による典拠の改変だと言っているのは⑨だけである(とはいえ、繰り返し返すが、指を切つて釣竿を奪う話を指を折つて釣竿を奪う話に変えた、という露伴の改変の説明は、類話との差異⑨に整合しない)。しかし、筆者には、⑥や⑪の要素などもまた、露伴が

もとの話に付け加えそうな要素に思える。露伴は、日本ではじめての釣り雑誌『釣の趣味』第一巻第五号に寄せた「予は釣界の創意を好む」という文章で、たとえば次のように言っていたりするからだ。

他人の作つた釣法に従ひ、他人の釣つた釣り場所に釣つて成功するよりも、自分の勘で釣法を創め、釣処を見付け、そこで大に当てたならば、更に多大の興趣あらん、既定の竿では面白く思わぬ点あり、竿に新意を加へて釣る道なきか、浮子も、世上既に人々の用ゆる所より外に、其形態用法に新意を加ふる余地なきか、釣糸なり鉛錘なり鉤なりびくなり、自分の智を応用する点なきか、餌の種類や用法、これ亦如何、古人の定めたるものを、今之改めて、より以上有数のものを発見し得ずや⁽³⁶⁾

釣りをめぐる文章以外にも人間が創意工夫することへ露伴はよく言及するが、釣り道具にもまた「新意」や「自分の智」を反映させることが好ましいのだという。つまり、露伴にとって釣りとは、自然の中で心を解き放つ遊びであるだけではなく、道具類への工夫まで含めた人間の創意を発露させる場でもあったということである。

「幻談」の旗本の男と船頭が「野布袋竹の丸の竿」とそれを握ってはなさな水死者を見つけた際、旗本の男は、当初、これにあまり関心を寄せていないが、竿を持つと、これを放しがたくなる。水死者がかたく握つたままの釣竿を、旗本の男も同時に握る。すると、「持たない中こそ何でもなかった」のに、急にこれが欲しくなってしまう。拾つた竿を翌日、旗本の男の家でくわしく観察していると、「吉」との間で次のような会話もなされる。

すつかり竿をそれで洗つてから、見るといふと如何にも良い竿。ちつと二人は儉め氣味で詳しく見ます。第一あんなに濡れてゐたので、重くなつてゐるべき筈だが、それがちつとも水が浸みてゐないやうにその時と思つたが、今も同じく軽い。だからこれは全く水が浸みないやうに工夫がしてあるとしか思はれない。それから節廻りの良いことは無類。さうして蛇口の所を見るといふと、素人細工に違ひないが、まあ上手に出来ている。それから一番太い手元の所を見ると一寸細工がある。細工と言つたつて何でも

ないが、一寸した穴を明けて、その中に何か入れでもしたのか又塞いである。尻手繩（しつて縄）が付いてゐた跡でもない。何か解らない。そのほかには何の異つたこともない。『随分稀らしい良い竿だな、そしてこんな具合のい、軽い野布袋は見たことがない』『さうですナ、野布袋といふやつは元來重いんでございます、そいつを重くちやいやだから、それで工夫をして、竹がまだ野に生きてゐる中に少し切目なんか入れましたり、痛めたりしまして、十分に育たないやうに片つ方をさういふやうに痛める、右なら右、左なら左の片方をさうしたのを片うきす、兩方から攻める奴を諸うきすといふ。さうして拵へると竹が熟した時に養ひが十分でないから軽い竹になるのです』『それはお前俺も知つてゐるが、うきすの竹はそれだから萎びたやうになつて面白くない顔つきをしてゐるぢやないか。これはさうぢやない。どういふことをして出来たのだらう、自然にかういふ竹が有つたのかナ』『⁽³⁷⁾

露伴「幻談」と類話二つは、いい釣竿を水死者から得るといふ大枠は共通するが、それがどのようによい釣竿なのかという細部には大きな隔たりがある。露伴「幻談」における釣竿の素晴らしさは、金銭に還元できるような価値とは違うものとして現れる。「幻談」で旗本の男が得る釣竿は、どこから入手したのかわからないほど見事な素材の探索と、元の持ち主が手づから施した創意工夫を認めることによって作品の中に具体的に現れる。二人は、その釣竿の素晴らしさと施された工夫の意味に接近しながらも、それは彼らの既知をどこか逸脱する側面を持つてゐるやうにも描かれる。事物（釣竿、釣り糸）の痕跡から遡るやうに、それを創造した人間の姿が想起されていく。そして、こののちにさきに引用した「吉」が「糸」という細部に着目し、水死者の生きた姿を想像する場面も続いていく。

終わりに

「もの」から遡行するやうに、その背景や、それを生み出した人間を想起するような描写は、露伴の一つの基底をなす特質に思われる。たとえば、露伴は、かつて「文明の庫」（二八九）で次のように言っていた。

人の世にあるほどのものは、如何なる么微なるものも、所以無くして忽然

と此の人の世に現れ出で来れるものにはあらず。ここに茶碗あり。此の茶碗は、所以無くして世に現れ出で来りしものなるべきや。否。またここに小刀あり。此の小刀は、所以無くして世に現れ出で来りしものなるべきや。否。茶碗も、小刀も、天より墮ち下り来れるならず、地より湧き出で来れるならず。必ず此の茶碗此の小刀を造り出ださんと働きたる人ありて、さて後、それらの人々の心により手によりて、はじめて人の世に現れ出で来れるなるべし⁽³⁸⁾

このように事物が先行し、それが目の前に現前している事実から、それをくった人間の営為に思いをめぐらす姿勢は、たとえば「苦心録」（二八九〇）などにも見られるように、露伴にはごく初期から晩年まで生涯を通して存在していた。そしてそれは小説においても同様で、「太郎坊」（二八九九）のような作品では破損したひとつの盃からその来歴が語り起こされる展開を見るが、それもまた「幻談」の釣竿や釣り糸の語り方と構造的によく似ている⁽³⁹⁾。

「幻談」「雪たゝき」「鴛鳥」「連環記」をめぐって岡保生は、「さまざまな先行作」の「素材」を「自由に綾なして」いくところに「小説家露伴の面目があった」と言う⁽⁴⁰⁾。では、その綾のなし方はどのようなものだったのか。この問題は、もっと深められていい。切断によって物語の糸が綾をなしていくというのはやや逆説的だが、「幻談」に三度登場する切断の反復は、露伴が先行する話を自分なりに語り直した際に新しく織ってみせた綾のように筆者には見える。わけても、水死者が竿を守るために糸にほどこした「段々細」を語る三つ目の挿話は、切断の意味を肯定的なものに反転させる、鮮やかな綾と言えるだろう。そして同時に、「段々細」がほどこされた釣り糸、「全く水が浸みないやうに工夫」された釣竿、それらの事物から水死者の創意工夫を遡って想起することは、人間がなにかを創り出す姿を描くという類話にない一面を付与し、「幻談」に小説としての豊かな興行きを与えている。

註

- (1) 主要なものは以下である。便宜的に番号を振って示す。①塩田聡「『幻談』へのいざない」『露伴小説の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、

一九八九年、八五―一〇二頁。②岡保生「昭和期の露伴」『新典社研究叢書二十七 明治文学論集一 硯友社・一葉の時代』新典社、一九八九年、一三〇―一四四頁。③青木稔弥「『幻談』の典拠」『文芸論叢』四十一号、大谷大学、一九九三年、三四五―三五六頁。④川村二郎「『幻談・観画談』『幻談の地平』小沢書店、一九九四年、六九―七九頁。⑤櫻井良二「『幻談』『釣り人露伴』近代文藝社、一九九五年、二一四―二三頁。⑥川西元「『幻談』論」『国語と国文学』七十五卷三号、東京大学国語国文学会、一九九八年、三一―四五頁。⑦野口武彦「江戸文学の地下水脈」『近代小説の懐胎幕末の旗本文士・鈴木桃野のこと』『江戸のヨブ われらが同時代・幕末』中央公論新社、一九九九年、六〇―九五頁、一三四―一七一頁。⑧吉成大輔「幸田露伴『幻談』論考」『緑岡詞林』二十五号、青山学院日文学院生の会、二〇〇一年、六九―八〇頁。⑨関谷博「『幻談』終りの作法」『幸田露伴論』翰林書房、二〇〇六年、三四四―三六五頁。⑩登尾豊「『幻談』考」『幸田露伴論考』学術出版会、二〇〇六年、一八九―二〇一頁。⑪齋藤礎英「二つの邯鄲の夢」『幸田露伴』講談社、二〇〇九年、三〇―三二七頁。⑫渡辺賢治「幸田露伴『幻談』試論 幽玄世界との境界」『国文学踏査』二三号、大正大学国文学会、二〇一一年、七七―九〇頁。岡②や青木③の論文では、「幻談」の類話の存在が指摘されている。

- (2) 小林勇「蝸牛庵訪問記」岩波書店、一九五六、八頁
(3) 下村亮一「晩年の露伴」経済往来社、一九七九、十一頁
(4) 前掲小林「蝸牛庵訪問記」、九九頁
(5) 前掲小林「蝸牛庵訪問記」、一〇六頁
(6) 前掲下村「晩年の露伴」、二一―二十一頁
(7) 前掲小林「蝸牛庵訪問記」、一五五―一五六頁
(8) 前掲吉成「幸田露伴『幻談』論考」七〇頁
(9) 前掲小林「蝸牛庵訪問記」、一五七頁
(10) 前掲下村「晩年の露伴」、十六―十八頁
(11) 幸田露伴「幻談」『日本評論』一九三八年九月号、四二〇頁、以下、「幻談」本文は初出に依る。
(12) エドワード・ウィンパー、浦松差佐美太郎訳『アルプス登攀記』下、岩波文庫、一九三六年、二七八頁

- (13) 前掲露伴「幻談」『日本評論』、四二三頁、傍線引用者
- (14) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』下、二六五―二六六頁、傍線引用者
- (15) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』下、二六七頁、傍線引用者
- (16) エドワード・ウインパー、浦松差佐美太郎訳『アルプス登攀記』上、岩波文庫、一九三六年、十頁
- (17) スイス公共放送協会「初登頂一五〇年 マッターホルンと負の遺産 切れたロープの謎」(<https://www.swissinfo.ch/jpn>) 二〇一五年、最終閲覧日・二〇二三年五月四日
- (18) フランシス・シドニー・スマイス、吉沢一郎訳『世界山岳名著全集 ウインパー伝』あかね書房、一九六六年、一七四頁、傍線引用者
- (19) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』上、一六一頁
- (20) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』下、二三三頁
- (21) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』下、二三四頁
- (22) 前掲ウインパー『アルプス登攀記』下、二六六頁
- (23) 前掲露伴「幻談」『日本評論』、四三〇頁、傍線引用者
- (24) 今回の議論の本筋ではないが、露伴と同じように釣りにまつわる話を多く小説化したモーパッサンに、「水の上」(Sur l'eau)という短編がある。「幻談」と併せて読むと興味深い、釣り人の一夜の体験を描いた小説である。この小説では、小さな舟に乗った釣り人が、夜のセーヌ川に投錨したところ、その錨が固着することで舟を動かせなくなる。不安な気持ちのまま夜を明かし、助けを借りて錨をようやく引き上げると、その錨とともに石をつけて沈められた老婆の死体があがってきた——という不穏かつ不気味な筋である。水中と船上を媒介するのが釣り竿と錨という違いはあれど、その先に水中の死者との遭遇が訪れるという意味で「幻談」とつながるように思える小説であり、水中からなにが現れるかわからない不気味さは、釣りや船上を小説で描く際のオーソドックスの一つと言えるかもしれない。この短編の翻訳は、「幻談」以前に『明治翻訳文学全集』《新聞雑誌編》三十一モーパッサン集Ⅰ（ナタ出版センター、一九九七年、三七七―三八八頁）によれば、一九〇五年に森山まほろし訳「せーぬ河」（『心の花』八月号）、一九〇八年に吉田白甲訳「錨」（『文芸倶楽部』十一月号）として二種が確認できるが、これを露伴が知っていたかはわからない。しかし、特に後者の翻訳は、作中人物の口調が船頭のような言葉使いで訳されていて、「幻談」の船頭、吉の言葉使いとの近似を感じさせる。一方で、本論で問題にするように「幻談」の重要なモチーフは固着と切断の反復であると考えれば、モーパッサン「水の上」は錨が固着し続けるということが重要なモチーフであり、この差異は、固着と切断が反復される「幻談」の釣り小説としての特徴を別の角度から教えてくれる。
- (25) 前掲露伴「幻談」『日本評論』、四三六頁、傍線引用者。なお、単行本『幻談』（日本評論社、一九四二年）では「放さずにゐたい心持」は、「放さずにゐた心持」に、「この厳しい例は」は「この面倒な法は」に、「鉢で頂戴して来る」は「頂戴して来る」に、修正されている。また、「段々細」の読み仮名は、初出では引用のように「段々細（だんくぼそ）」と書かれているが、単行本では「段々細（だんくぼそ）」に変わっている。初出に従った。
- (26) 前掲関谷『幸田露伴論』、三四五―三四六頁
- (27) 前掲岡「昭和期の露伴」、一三四頁
- (28) 薄田泣菫「片腕」『後の茶話』玄文社、一九一八年、二六一―二六三頁
- (29) 前掲青木「幻談」の典拠
- (30) 鈴木桃野「反古のうらがき」『鼠璞十種 第二』国書刊行会、一九一六年、四〇八頁。「反古のうらがき」の魅力は、前掲野口「近代小説の懐胎 幕末の旗本文士・鈴木桃野のこと」に詳しい。
- (31) 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」『日本文学研究資料叢書 幸田露伴・樋口一葉』有精堂、一九八二年、一〇二―一二二頁
- (32) 前掲『鼠璞十種 第二』七頁。日沼澁治『露伴九十九章』未知谷、二〇〇六年、一一三―一八頁、一八〇頁
- (33) 三村竹清『日本書誌学体系 七三 欣賞會記録』青裳堂、一九九六年。三村清三郎「欣賞會記事」『露伴全集』附録、岩波書店、一九七九年、九八一―一〇二頁は、三村の手控えから露伴に関係する部分だけを抜き書きしたものの。「清三郎」は竹清の本名。
- (34) 塩谷賛「幸田露伴」下の一、中公文庫、一九七七年、一二二頁
- (35) 前掲野口「江戸文学の地下水脈」、前掲吉成「幸田露伴『幻談』論考」
- (36) 幸田露伴「余は釣界の創意を好む」『名著復刻 日本の釣り集成 釣りの趣味 全五冊』所収「釣の趣味」一九一九年二月号（アテネ書房、一九七九年）

四―五頁、傍線引用者

(37) 前掲露伴「幻談」『日本評論』、四三五―四三六頁、傍線引用者

(38) 幸田露伴「文明の庫」『露伴全集』第十一巻、岩波書店、一九七八年、二三八頁、傍線引用者

(39) 「幻談」作中で描かれる、事物から廻る想起の構造が、「太郎坊」とよく似ていることは、筆者の博士論文審査(二〇二〇年一月)の際、出口智之氏(東京大学)にいただいた指摘を踏まえている。

(40) 前掲岡「昭和期の露伴」、一三四頁

※本論は、二〇一七年日本近代文学会関西支部秋季大会にて行った発表に基づく。発表に際しては、多くの貴重なご指摘を賜ったことに感謝するとともに、論文化するのに手間どったことをお詫びする。

Tension and Snap: A Reading of Koda Rohan's "Gendan" (1938)

Daisuke YOSHIDA

This paper discusses KODA Rohan's (1867-1947) "Gendan" (1938), which is divided into two parts, "Mountain Story" and "Sea Story." Precedent studies have discussed the author's juxtaposition of these parts from the following two approaches. One approach places less emphasis on descriptions made by Edward Whymper, who is mentioned in "Mountain Story," interpreting it as a mere head-in to "Sea Story" and instead focusing on the analysis of the latter. The other seeks to understand the continuity of the two parts through the thematic proximity of "death" and "illusion."

This paper explores alternative approaches to "Gendan" by illuminating detailed similarities between the two parts; the retelling of Whymper's *Scrambles amongst the Alps in the Years, 1860-69* (1871) in "Mountain Story" and the narrated events on the ship (also a retelling) in "Sea Story." I argue that these two parts are also connected in the development of the plot in-

volving some rope-like object (rope/fishline) which becomes taut and then suddenly snaps in both narratives.

The paper then revisits differences between "Sea Story" and similar stories that preceded it, as they deserve further exploration and broader discussions. I argue that one of the significant differences between them lies in the fact that the "fishing rod," which plays an essential role in the latter half of "Gendan," turns out to be not a purchased item but an artefact created with the ingenuity of the drowned person.

To conclude, "Gendan" can be read as a narrative of the abrupt snapping of rope-like objects, and it also describes a way of looking back at the ingenuity of the deceased from the items they leave behind. In addition, the paper indicates the snapping of the rope-like objects positively changes its meaning as the work progresses.